

## 『小夜衣』の和歌表現

—— 2音1因子方式による類歌抽出結果の検討を通して ——

安 道 百合子

中世王朝物語の成立時期や作者を考えるにあたって、その作品が先行する作品から影響を受けたと思われる表現の検討は、大きな手がかりを与えてくれると考えられる。引き歌や物語取りとよばれる引用の方法は、読者の連想に支えられて、さらなる物語世界の広がりを生む。反面、有機的なつながりを果たしえなかった表現は、ある場合は剽窃と呼ばれ擬古という評価に甘んじるほかない場合もある。そもそも、影響如何は、物語作者による極めて意図的な方法である場合と、時代性を反映した偶然の結果である場合とがあるのではないだろうか。

稿者は、コンピュータによる類似表現抽出の方法を模索している。コンピュータによる類似表現抽出の基本は、同じ音をどの程度共有しているかを測ることである。いくつかの方法があるなかで、ここでは2音1因子方式<sup>(注1)</sup>による類歌検索の方法による結果の検証を進めたい。2音1因子方式は、比較対象とする二つ以上の文字列において、連続する2音節を1因子とした場合に、いくつの因子を共有するかを数値で示したものである。31音という制約がある和歌という文学形態において、この方式は、類似を測るという点ではかなり有効である。歌語には2音・3音の名詞が多く、また活用語の語幹の一致をもらすこともないからである。その結果は物語の成立に関わる示唆を与えてくれるものではなからうか。

ここでは、『小夜衣』の作中和歌について、新編国歌大観所収全和歌との比較を試みた結果を報告し、類歌として抽出された和歌の検討を行いたい。この作品は、中世王朝物語のなかでは、比較的恵まれた作品で、「中世王朝物語全集」<sup>(注2)</sup>に収められて全訳が付されてあるほか、『小夜衣全釈 付総索引』『小夜衣全釈 研究・資料編』<sup>(注3)</sup>の研究書二冊が刊行されている。コンピュータによる抽出結果の検討には、ある程度、研究の後追いが必要であると考え。『小夜衣全釈 研究・資料編』には「『小夜衣』引歌関連資料」<sup>(注4)</sup>がおさめられており、抽出結果の検討に際し、同書との照合をおこなった（以下、同書を『全釈』と呼ぶ）。人が読み確かに影響が認められると気付く表現を確実に抽出し得ていることを確認し、さらにそれ以外に人の目で気付かなかった類似を見出してこそ、新たな方法として意味があるというものであろう。

物語『小夜衣』の内容は、継子物語の要素を多分に含んだ恋愛物語である。乾澄子氏が「『小夜衣』の特徴は何といってもその縦横無尽な先行作品の引用にある」<sup>(注5)</sup>と述べられたごとく、この作品には、先行する作品の引用が膨大にある。それら物語取りや引き歌表現の指摘は先学により十分に行われてきたと思われる。乾氏は「思い出されるのは、『物語二百番歌合』あるいは『風葉和歌集』などに見られるような、物語の作中詠歌を場面から切り出し、歌合、歌集として編纂することにより、新たな作品世界を生み出すというあり方である。」とされ、『小夜衣』が平安期の作品からさまざまな文章や構造を取り出し、再構築したものとしての積極的な意味を認められた。一方、辛島正雄氏は「『源氏』『狭衣』から借りた大量の表現が、『小夜衣』の文章としてここに導入されはしたものの、そのことが、さして物語を推進する力となりえていない、ということが、筆者には不満なのである」と述べられ、この作品に「表現の自律性とでもいったもの」が「決定的に不足している」と指摘されたうえで、それもまた「中世王朝物語」らしさの一端であるとまとめられている<sup>(注6)</sup>。

## 二

本稿では、『小夜衣』の作中和歌の類歌をとりあげようとしている。コンピュータが抽出した類歌をながめてみると、『源氏』『狭衣』などの作中和歌との類似が全く見当たらない。特に上巻は約3割にも及ぶ分量で、『源氏』や『狭衣』からの詞章を含んでいるにもかかわらず、和歌について、明らかに『源氏』の和歌を踏まえた表現は、ないのである。一方で、二句以上にわたって表現の一致が見られる和歌がある。これは少なからず予想を裏切る結果であった。

通常類歌検索の結果は、二、三個の同じ語彙をどちらも用いている場合が多い。一般に本歌取りの歌を思い浮かべてみても、二句以上にわたってまったく同じ文言を使うのは工夫とはみなされにくいからである。

たとえば、『小夜衣』の題号が由来すると考えられる歌語「さよころも」を含む和歌の場合。この作品には、66首の和歌が存するが、そのうち8首に「さよころも」ないしは「さよのころも」が読み込まれている。【 】内の数値は『小夜衣』の作中和歌番号である。

【9】 ころにもあらずへたつるさよころもかさねしそてのかわくまそなき

【10】 さよころもうつれはかはるならひとてうきみにしらるそてのなみたを

【11】 としふともかはらしものをさよころもふかくもおもひそめしいろをは

【12】 ふかかりきいろともいのかたのむへきあさくもそめしさよのころもを

【37】 あさかりきいろとうらみしさよころもふかくはたれかそめまさるらむ

【38】 あさくこくなにそむらんさよころもいつれのいろといかてしらまし

【39】 あさきこきいろともしらすうきみにはなみたにくちしさよのころもを

【61】 はかなくもおもひたちけるさよころもかさねぬそでのなにしをるらむ

ところがこれらの和歌の類歌として抽出されたものを見ると、「さよころも」なる語を含んでいる歌はあまり無いことがわかる。上記いずれの歌についても14ポイント以上の類歌はなく、12～13ポイントの和歌にも「さよころも」の語を含まない歌ばかりが抽出された。

『小夜衣』【9】【10】【11】の和歌に関しては、夙に、『狭衣物語』からの影響が指摘されている(注7)。

- ①あひ見ねば袖ぬれまさるさ夜衣一夜ばかりも隔てずもがな(狭衣詠)
- ②いつまでか袖ほしわびんさよ衣へだて多かる中と見ゆるを(飛鳥井の女君詠)
- ③夜な夜なをへだてまさらばさ夜衣身さへうきてもながるべきかな(飛鳥井の女君詠)

とくに【9】と①の歌とを比べると、「さよころも」の歌語の一致のみならず、「へだて」と「袖ぬれまさる」ので隔てないでほしいと呼びかけた狭衣詠を、おもいがけず「へだて」てしまったゆえに「袖のかわく」時がないと詠み変えたものと理解できる。しかし、音の一致を数える2音1因子方式で13ポイントで抽出されたのは、次の和歌一首であった。抽出された類歌はポイントの数値・新編国歌大観所収歌集名・歌番号・和歌の読み(仮名表記)によって示す。比較の過程で、同じ2音を見つけたときに、相手和歌の2音の間に/を入れて表示させた。同じ2音を複数回数えるのを防ぎ、ポイントの精度を高めるためである。なお、国歌大観の和歌データを仮名にすることは、ある程度のプログラム処理を経て私におこなったが、完璧なデータとは成りえていないため、ポイントに若干の誤差が生じることはある。

#### 13P・隆信集【362】

あさから/すこ/ころをかけしなみちよりぬれにし/そ/て/の/か/わ/く/ま/そ/な/き

『隆信集』は『寿永百首家集』の一集と考えられ、寿永元(1182)年夏頃の成立とされる。隆信の母は若狭守親忠の女(美福門院加賀)で俊成と再婚し、成家・定家を生んだ。すなわち、隆信は俊成を養父とする。

ついで12ポイントに以下の和歌がある。

#### 12P・拾遺和歌集【1290】〈読人知らず/拾遺抄556番、奥儀抄151番にもあり〉

こ/こ/ろ/に/も/あ/らぬうきよにすみそめのこ/ろ/ものそ/て/のぬれぬひそ/な/き

#### 12P・和泉式部集【586】

あめもよにかよふこ/ころしたえせねはわかこ/ろ/もて/の/か/わ/く/ま/そ/な/き

ごく単純に考えるなら、平安中期からあった「衣手」が「乾く間」がないとする詠み方が「そでのかわくまぞなき」という連続した表現で定着するのが平安後期ということになるか。実際「そでのかわくまぞなき」という連続した歌句は、『隆信集』のほか、鎌倉期の『続拾遺和歌集』、『隆祐集』、『建保名所百首』などの歌集に現れる。ありふれたフレーズのように見えても、新古今

以降の歌人による表現であることがわかる。

これはまた、定家の「小夜衣」詠との類似に着目され、「衣」に関する様々な表現の歌語が1200年代を中心に1300年代の初めにかけて流行していることを検証されたうえで、『小夜衣』の成立を『拾遺愚草』以降とされた豊島秀範氏の論(注8)にも矛盾しない。

このような結果は、特異な歌語にのみ目を向けていては見つからない、作者の生きた時代の流行を反映したものと受け止めることもできるのではないかと考える。

さて、歌語「小夜衣」を含む和歌について、いまいし、類歌を掲げておきたい。『小夜衣』の歌番号をはじめに掲げておく。

【10】 さよころもうつれはかはるならひとてうきみにしらるそてのなみたを

13P・現存和歌六帖【658】

ひ／と／そう／きう／つ／れ／は／か／は／る／な／ら／ひたに／し／らぬむかしに／はふたちは  
な

12P・道助法親王家五十首【443】

な／ら／ひか／はう／つ／れ／は／かは／る／そ／て／のうへにかこちかほなるはきのし／らつ  
ゆ

【11】 としふともかはらしものをさよころもふかくもおもひそめしいろをは

12P・新統古今和歌集【1088】〈兵部卿隆親〉

お／も／ひ／そ／め／し／い／ろはか／は／ら／しみつとりのあを／はのやまはなほしくると／  
も

12P・菊葉和歌集【1230】〈顕守法師〉

と／し／ふ／と／も／か／は／ら／し／も／の／をしらきくのうつろはてみむあきとお／もへは  
『現存和歌六帖』は鎌倉期類題集。1249年に六帖がなり、1258年頃までに補訂して完成したものとされる。道助法親王は鎌倉期の歌人(1195～1249)。『新統古今和歌集』は二十一代集最後の勅撰集(1447年頃第二次奏覧本)だが、この歌は詞書に「宝治百首歌に」とあり、作者隆親は鎌倉期の歌人(1203～1279)である。『菊葉和歌集』は室町期私撰集(1400年ごろ成立)で伏見宮歌壇の歌人の歌を多く収める。このうち、『菊葉和歌集』についてはやや時代が下るうえに、これらの類歌と『小夜衣』との直接的な影響関係があるかどうかは、証明しようがない。が、「小夜衣」という歌語の流行した時期とほぼ同じ時期の和歌に、「うつれはかはるならひ」や「おもひそめしいろ」は「かはらじ」という同じ表現が見出せることは興味深い。この作品における「小夜衣」という歌語は、複数の和歌に用いられており、題号の由来歌として一首に物語の主題を担わせるほどのインパクトを持つ歌があるわけではない。類歌検索の結果は、そのことを示すと同時に、その他の類似表現に着目すれば、まさに時代の流行を反映して縦横無尽に表現を踏襲する創作態度の一端を垣間見せた結果ともいえるのではなからうか。

三

ここで、2音1因子方式により高いポイントで抽出される和歌がどのようなものかを例示したい。まず、15ポイント以上の上位に抽出された類歌について、ポイントの高い順に例示する。20ポイントから15ポイントの和歌は12首ある。

20P

【59】おもひあまりいまかきなかつきつきのなかれあふせのちきりともかな

①三井寺山家歌合【76】

お／も／ひ／あ／ま／り／け／ふ／か／き／な／か／す／み／つ／く／き／の／な／か／れ／あ／ふ／  
せをいつとしらはや

18P

【54】もしほくさかきあつめたるあとみれはいととしをるるそてのうらなみ

②衆妙集（幽齋）【600】〈黄葉集1625番にもあり〉

も／し／ほ／く／さ／か／き／あ／つ／め／た／る／あ／と／と／め／て／む／か／し／に／か／へ／せ／わ／か／の／う  
／ら／な／み

17P

【33】もろともにすみこしひとをしのふくさなみたのつゆのおかぬまそなき

③永享百首【808】

わ／す／れ／ゆ／く／ひ／と／を／し／の／ふ／く／さ／の／は／に／な／み／た／の／つ／ゆ／そ／お／か／ぬ／ま／  
そ／な／き

16P

【7】こととはてすきにけるかなほとときすうのはなさけるやとのかきねを

④壬二集（家隆）【217】

う／ち／わ／ふ／る／や／と／や／な／か／ら／む／ほ／と／と／き／す／う／の／は／な／さ／け／る／か／き／ね  
つつきは

【48】なきひとのかたみのくもはかつきえてむなしきそらをなかむはかりそ

⑤続古今和歌集【1431】

な／き／ひ／と／の／か／た／み／の／け／ふ／り／そ／れ／た／に／も／は／て／は／む／な／し／き／そ／ら／に／き  
／え／つ

15P

【18】おほつかないかにむすひしくさまくらなみたのつゆのかかるちきりは

⑥成尋阿闍梨母集【73】

く／さ／ま／く／ら／な／み／た／の／つ／ゆ／の／か／か／るをやみねき<sup>本ニ本</sup>つらなくき／りき  
りす

【24】 すみなれしふるすをすててたつのこのたちわかるへきこちこそせね

⑦八重葎【5】

なかむれはまたをしまれてあききりの／た／ち／わ／か／る／へ／き／こ／こ／ち／こ／そ／せ  
／ね

【31】 おもふにはひとのつらさもなかりけりわかこころよりかはるこころを

⑧拾玉集（慈円）【1451】

よのな／かのひ／と／の／つ／ららをお／も／ふ／に／はわ／か／こ／こ／ろまでととこほり／  
け／り

【45】 しらすやはこころのうちのやみはれてくもるのそらにすまむつきかけ

⑨新葉和歌集【608】

いのりおくこ／こ／ろ／の／や／みのいつは／れ／て／く／も／るに／す／ま／む／つ／きをみ  
るへき

【54】 もしほくさかきあつめたるあとみれはいとしをるそてのうらなみ

⑩千五百番歌合【2955】

も／し／ほ／く／さ／か／きおくすゑのあ／と／と／み／れ／はむかしにこゆるわか／の／う／ら  
／な／み

⑪新古今竟宴和歌【3】

わか／の／う／ら／な／みものとききみよなれ／はか／き／あ／つ／め／た／るたまも／し／ほ／  
く／さ

【59】 おもひあまりいまかきなかすみつくきのなかれあふせのちきりともかな

⑫光吉集【193】

お／も／ひ／あ／ま／りもみちにか／きしみ／つ／く／きもな／か／れ／あ／ふ／せはあり／と  
こそきけ

以上のように、ポイントの高い歌は二句以上にわたる共通句を持つ場合が多い。

【59】については、①の歌がかなり高いポイントで抽出された。これには⑫歌も15ポイントで抽出されている。『三井寺山家歌合』は1166～1174年ごろの成立とされ、①歌は実暹の作である。また『光吉集』は惟宗光吉（～1352）の家集で1354～1358年に息光之が新千載集の資料として撰んだものとされている。いずれの歌も、『小夜衣』引歌関連資料には参考歌としてあげられているが、安田徳子氏は「著名でない歌人の小さな家集の歌」であり「偶然の一致と見たほうがよいかもしれない」とされる<sup>(注9)</sup>。

あわせて気になるのは「みづぐきのあと」という表現で【54】歌との関わりである。本作品中「みづぐき」という語は三例あり、【59】歌の「みづぐき」のほか、「みづぐきのあと」という表現が【54】歌の直前と【9】歌の直後との物語本文に見える。「みづぐきのあと」は前者は別れざるを得ない物語の主人公、宮の筆跡を意味し、後者は、同じく姫君の筆跡を意味する。「みづぐきのあと」という表現は、『実材母集』に12首も詠われ、実材母の歌風を特色づけた歌語であると同時に、中世和歌に頻出する表現であった。【54】歌はそれを「もしほくさかきあつめたるあと」と表現し、これは幽斎(1534~1610)の和歌に類歌がある。ただし「もしほくさかきあつめたる」という表現は

実家集【335】〈実家(1145~1193)〉

も／し／ほ／く／さ／か／き／あ／つ／め／た／るかすことにみるかひもあるわかの／う／らかな

歌枕名寄【8354】〈藤原惟方(1125~)詠。風雅1883番にもあり〉

も／し／ほ／く／さ／か／き／あ／つ／め／た／るわか／の／う／らのそのひとなみにおもひいてすや

の先例があり、惟方歌については参考歌との指摘がある(注10)。

【33】については、『全釈』は

新古今和歌集【1493】ひとり寝る宿のとなつ朝な朝な涙の露にぬれぬ日ぞなき

を参考歌にあげている。③『永享百首』は第21代勅撰集『新統古今集』撰集資料とするための勅命百首歌。1434年あたりの詠作とみられる。やや時代は下るが、「涙の露のをかぬまぞなき」は一致する。

【48】歌については、同様の発想の歌は物語にも多く見えるが、『全釈』は

新古今和歌集【803】なき人のかたみの雲やしほるらんゆふべの雨に色はみえねど

を引き歌としてあげる。⑤は顯氏(~1352)詠で二句は「なきひとのかたみのけふり」とあるが、「むなしきそら」「きえ」などの語句が一致する。

【18】は『全釈』に指摘はないが、⑥に二句以上に渡る一致が見出せる(注11)。同じく【24】も先行注には指摘はないが、下の句が一致する。また、最後の『八重葎』の例も同様で、一つ一つの語彙がさほど特徴的というわけではないが、連続する二句を有する和歌はほかにはない。コン

ピュータが抽出する和歌には、意識的には探しにくい一致が見られるのである。とりわけ 15 ポイント以上の類似は、連続する二句以上の一致が多い。1300 年代の人物の歌がいくつか見えることも気にとめておきたい。ただし、それがただちに影響関係があるかどうかという点は慎重にならねばなるまい。

#### 四

この作品において、もうひとつ突出して読み込まれている歌語は「ほととぎす」である。「ほととぎす」を含む歌は 9 首存し、その数は「さよころも」よりも多い。また、こちらのほうが類歌は多く抽出されている。「ほととぎす」のようにそれ自体 5 音で一句を作り、かつ頻出する歌語の場合は、ポイントが高くとも、類似かどうかの判断そのものに迷う場合も多い。以下に、「ほととぎす」詠のうち、連続する二句以上の一致を含む歌と、三語以上の同一歌句を含む歌とをならべてみる。ポイント数の前に○を付けてあるものは、『全釈』に指摘のないものである。

【1】みのほとはおもひしれともほととぎすなほはつねをはいつかとそまつ

11P・新葉和歌集【974】

み／の／ほ／と／は／お／も／ひ／し／れ／と／もけにひとのうきにはたへすうらみわひつつ

11P・為家千首【720】

み／の／ほ／と／は／お／も／ひ／し／れ／と／もみしひとのうきをならひにうらみつるかな

【2】かすならぬみをうのはなにほととぎすはつねをきくもいかかとそおもふ

○14P・兼澄集【76】

か／す／な／ら／ぬ／みには／つらさのしられつつなけくはきみ／をい／か／か／と／そ／お／も／ふ

○14P・久安百首【485】

ひとことに／ほ／とけのたねはありとかやか／す／な／ら／ぬ／みはい／か／か／と／そ／お／も／ふ

【7】こととはてすきにけるかなほととぎすうのはなさけるやとのかきねを

○14P・定頼集【89】

ほ／と／と／き／すかたらふや／と／のう／の／は／なのみゆる／か／き／ね／をたつねつるか／な

○14P・嘉元百首【618】

ほ／と／と／き／す／う／の／は／な／や／ま／は／あ／か／す／と／も／な／ほ／わ／か／や／と／の／か／き／ね／た／つ  
ねよ

【8】ほととぎすかたらふほともなきものをうたてあげぬるしののめのそら

○14P・中書王御詠（宗尊親王）【60】〈新三井和歌集 132 番にもあり〉

うきみをはか／た／ら／ふ／ひ／と／も／な／き／も／の／を／な／さ／け／あ／り／け／る／ほ／と／と／き／す／  
かな

○13P・俊光集【143】〈俊光（1260～1326）〉

あくるよのつきを／うしとやほ／と／と／き／す／な／き／て／わ／か／る／し／の／の／め／の／そ／  
ら

【51】ほととぎすあるしをしたふかきねにもしのひねたえぬさみたれのそら

○13P・万代和歌集【699】〈1248 初撰本、1275 再撰本〉

し／の／ひ／ね／の／と／も／と／お／も／ひ／し／ほ／と／と／き／す／こ／ゑ／た／て／つ／な／り／さ／み／た／れ／の／そ／  
ら

○13P・山家集（西行）【197】

ほ／と／と／き／す／し／の／ふ／う／つ／き／も／す／き／に／し／を／な／ほ／こ／ゑ／を／し／む／さ／み／た／れ／の／そ／  
ら

【56】ほととぎすおはしころにねをそなくむかしをいかにしのふころか

○13P・拾藻鈔（公順）【418】〈鎌倉期積公順の歌集、1293～1336 の詠作〉

おもひいつるこ／ろもうつきのほ／と／と／き／す／む／か／し／を／し／の／ふ／ね／を／の／み／そ／な  
／く

13P・拾遺和歌集【820】

こぬひとをまつちのやまのほ／と／と／き／す／お／な／し／こ／こ／ろ／に／ね／こ／そ／な／か／る  
れ

○13P・為家集【340】

ゆめさむるおいのまくらのほ／と／と／き／す／お／な／し／こ／こ／ろ／に／ね／そ／な／か／れ／け  
る

○13P・政範集【400】〈1278～1287 の詠か。作者は実材母の子・孫か。〉

ものおもふよはのねさめのほ／と／と／き／す／お／な／し／こ／こ／ろ／に／ね／を／た／に／も／な  
け

とりたてて引き歌や参考歌としてとりあげられないものを含むが、これらの和歌はやはり類歌と呼ぶに値するだけの歌句の一致があり、しかも中世歌人の和歌が多い。『全釈』は細部にわたって適切な資料を提供してくれている。それから考えると、コンピュータが抽出してくる和歌と、読者が連想して読むことを期待されている引き歌とはやはり異なる性格があるようである。後者は物語作者の技量の見せ場であり、作者と読者との間にかわされるスリリングな楽しみである。対して、今回試みた抽出結果で高いポイントを得た和歌は、作者の舞台裏をのぞくような側面があり、作者が常日頃接している和歌の傾向がはからずもあらわれたとみなすことができるのではないだろうか。

安田徳子氏は「二条為明と『小夜衣』」において詳細な引き歌表現の検討をされたうえで、「『続千載集』から『新千載集』成立頃までの鎌倉末期から南北朝期にかけての和歌、それも二条派の和歌と通じる傾向が多いようである。」とされた<sup>(注12)</sup>。コンピュータが抽出した類歌の検討を加えることは、和歌の傾向を論じるのに有益な成果を出してくれるのではないかと期待できる。

## 五

【40】ゆきかへりいくたひそてをぬらすらむはかなくむすふつゆのちきりに

14P・続千載和歌集【1442】〈飛鳥井雅朝（～1338頃）〉

たちか／へり／い／く／た／ひ／そ／て／を／ぬ／ら／す／ら／むよそになるみのおきつしら  
なみ

この【40】歌について『全釈』は

続千載和歌集【804】ささ枕いくののすゑにむすびきぬ一夜ばかりの露のちぎりを

という宗尊親王の和歌をも参考歌としてかかっている。類歌検索ではこの歌は抽出されない。男主人公が女君の行方をさがしだせず、はかない二人の仲を嘆くというこの歌を理解するとき、「露のちぎり」というのは重要なキーワードとなる。しかし「露のちぎり」なる歌語そのものは和歌に頻出する。引き歌認定は、作者の思考に近づくことだと思う。物語を読むという経験を積みつつ、ピンとくることである。コンピュータによる類歌検索の方法はいまのところ、連続する音の一致度で高いポイントを示すから、ただ一語のキーワードをもとに作者の思い描く世界を生み出している和歌を抽出することは難しい。

しかしながら、逆に、人の目は特徴的な歌語に向きがちである。作品の特性をとらえようとすると、一般的な歌語よりも、珍しい歌語により特徴を見出す。コンピュータによる類歌検索で成

果が期待できるとすれば、そのような意識にとらわれない音の一致である。それが時代の好みや傾向をたどることにつながるなら、おもしろい意義のあることと思う。さらに成立や作者圏の検討につながるができるかどうか考察を進めたい。

【注】

- (注1) 2音1因子方式は中村康夫氏考案のコンピュータによる類似歌検索の方法である。  
連続する2音節を一つの因子として、同一因子を見つけたらポイントを加算するという方法で、二つの和歌の類似度を測る。稿者は中村氏に方法を学び、和歌データを私に作成し、結果を導き出した。プログラムの詳細は『これで使えるコンピュータ』(中村康夫・安道百合子共著・和泉書院より刊行予定)に発表予定である。
- (注2) 辛島正雄氏校訂・訳注『小夜衣』(笠間書院 中世王朝物語全集9,1997)
- (注3) 名古屋国文学研究会著『小夜衣全釈 付総索引』(風間書房,2000)。名古屋国文学研究会著『小夜衣全釈 研究・資料編』(風間書房,2001)
- (注4) 類歌表現の検証には、『小夜衣全釈 付総索引』の注記のほか、資料編の浅井圭子氏・末廣和子氏「一、『小夜衣』引歌関連資料」を利用させていただいた。
- (注5) 乾澄子氏『『小夜衣』における先行作品の引用について—平安期の物語を中心に—』(『小夜衣全釈 研究・資料編』所収)
- (注6) 中世王朝物語全集『小夜衣』の解題による。
- (注7) 『狭衣』からの影響が見出せることについては、辛島氏の解題、「『小夜衣』引歌関連資料」をはじめ、諸氏の指摘がある。さらに、梅野きみ子氏は「『小夜衣』の成立とその作者像—『とはずがたり』に注目して」(『小夜衣全釈 研究・資料編』所収)において、歌語「さよごろも」が『とはずがたり』にも用例があることを起点として、『小夜衣』『とはずがたり』両作品が、踏まえている出典の類似傾向を指摘し、「あるいはこの両作品の執筆は同一作者によるのではなからうか」と述べられた。
- (注8) 豊島秀範氏「〈衣〉の系譜—狭衣・小夜衣・苔の衣—」(『弘前学院大学紀要』18号, 1982)
- (注9) 安田徳子氏「二条為明と『小夜衣』」(『小夜衣全釈 研究・資料編』所収)
- (注10) 『小夜衣全釈 付総索引』の頭注にある。
- (注11) 梅野きみ子氏は前掲(注7)論文において、「数ならぬ身をうき雲」という表現に関して、『源氏物語』から中世和歌にまで頻出する慣用語であるが、女流歌人の詠歌が多く取り入れられるという『小夜衣』の傾向から思うに、成尋法師母の詠歌を参考にしたとみてはどうであろうか」と述べ、『続後拾遺和歌集』所収の「数ならぬ身をうき雲のかかる世にながらへてとは思はざりしを」を典拠とされる。
- (注12) 前掲(注9)論文による。
- (付記) 本稿は、平成19年度科学研究費補助金(若手研究(B))による研究成果の一部である。